

## 木質文化財研究会 平成27年度第1回定例研究会

秋田県立大学木材高度加工研究所

栗本 康司

木質文化財研究会では、10月2日（金）～3日（土）の日程で秋田県にかほ市象潟町において「十和田火山および鳥海山の噴火と木材（埋もれ木）」と題した定例研究会と見学会を開催しました。両日程とも沖縄県に暴風をもたらした台風21号の影響を受け荒れた天候となりましたが、初日の研究会では68名、二日目の見学会では7名の参加があり盛会のうちに日程を終えることができました。なお、今回の研究会は、「にかほ市教育委員会」との共催に加えて、「鳥海山・飛島ジオパーク構想推進協議会」より後援を頂いたことから、このように多数の聴講者を得ることができました。

さて、「象潟」は、皆さんがご存じのように、古くから「松島」と並び称された東北の名所です。その景観は、紀元前466年に鳥海山が噴火し、発生した大規模な岩なだれが日本海にまで流れ込んで浅い海と多くの流山をかたち作ったことに始まります。その後、堆積作用により潟湖ができ、流山には松が生い茂り、風光明媚な地形ができあがりました。松尾芭蕉が「奥の細道」の旅（1689年）で見た風景は、このようなものです。しかしながら、文化元年（1804年）の象潟地震で海底が隆起して陸地化し、この風景は失われました。現在、島々は水田の中に点在し往時の面影を伝えています。

噴火や地震などの災害は、人々の生命や財産に大きな被害を与えるものです。一方、偶然の産物ではありますが、土砂に埋もれた樹木や家屋跡が発見されることで、当時の環境や生活を知ることができます。見つかった埋木や建築部材は「タイムカプセル」と言えるのではないのでしょうか。

今回の研究会では、特徴的な景観を形作る原因となった火山の噴火に注目し、十和田火山の噴火による土石流と鳥海山の山体崩壊によってつくられた景観、歴史、埋没材、埋没家屋を対象として、4名の講師からご講演を頂きました。尚、各講師のご講演内容につきましては要旨集を作成しています。興味のある方は栗本（kuri@iwt.akita-pu.ac.jp）まで連絡をお願いします。

### ◆講演タイトルと講師

「噴火と地震がつくった景勝地と埋もれ木」

林信太郎 先生（秋田大学・教育文化学部）

「景勝地象潟と鳥海山」

斎藤一樹 先生（にかほ市教育委員会・象潟郷土資料館長）

「鳥海山埋没スギの年輪年代学的解析」

大山幹成 先生（東北大学・学術資源研究公開センター植物園）

「1100年前に噴火した十和田火山と胡桃館遺跡埋没建物」

榎本剛治 先生（北秋田市教育委員会）

最後に、二日目の見学会について若干紹介します。

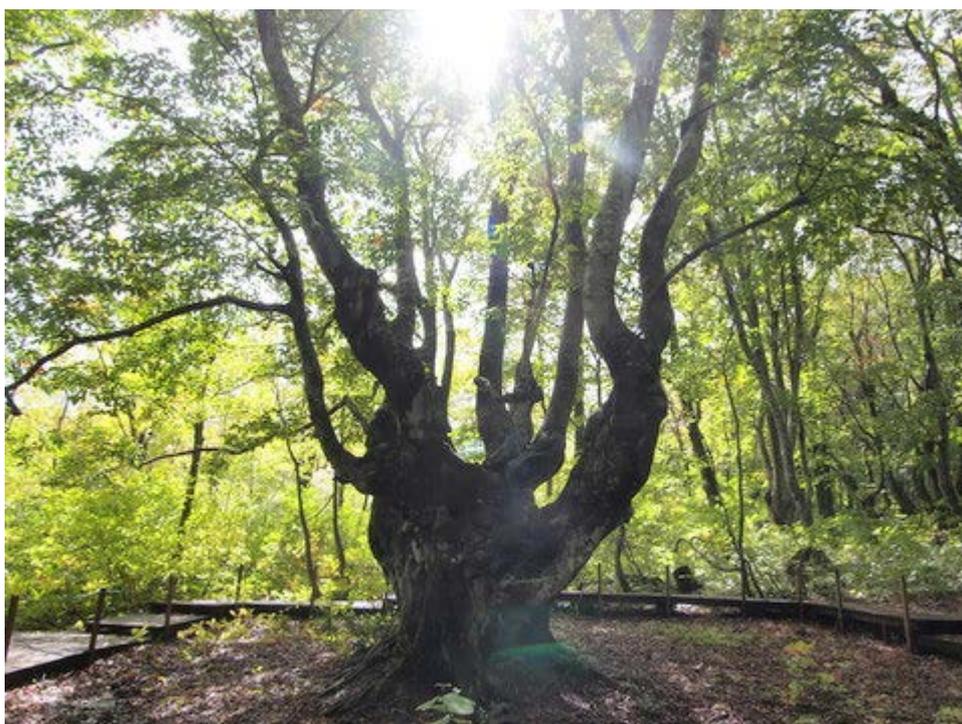
小雨が降るなか鳥海山麓北側に位置する「中島台レクリエーションの森」へワゴン車で向かい、管理事務所から徒歩にて散策を開始しました。

中島台レクリエーションの森は「あがりこ大王」をはじめ、奇形巨木が多数存在するブナ林です。奇形の理由は、炭焼きのために積雪期に伐採した枝から、ぼう芽によるブナの成長が続いたことが、この独特な樹形になったと言われています。空に向かい大きく枝を広げ成長する生命力に大変感動しました（写真）。

さらに、森には「獅子ヶ鼻湿原」と呼ばれる湿原が形成されています。ここは、鳥海山の伏流水が流れ出すことで滞留し、約26ヘクタールの広さをもつとのこと。我々は「あがりこ大王」に別れを告げ、伏流水が流れ出している「出つぼ」のほか、流水の中でボール状に発達した「鳥海まりも」を経て、管理事務所へ戻りました。

歩いた遊歩道の距離は約5 km、所要時間3時間足らずでしたが、森林のすばらしさを心身共に感じる有意義な時間を持つことができました。

獅子ヶ鼻湿原の情報については、にかほ市観光協会のHP等を参照下さい。



「あがりこ大王」